

東京展開催概要

- 会期 平成18年4月12日(水)～5月28日(日)
- 開館時間 10:00～17:00(入館は16:30まで)
- 休館日 毎週月曜日
- 会場 東京藝術大学大学美術館 展示室3・4(3階)
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
* JR上野駅公園口、東京メトロ千代田線根津駅より徒歩10分
* 京成上野駅、東京メトロ日比谷線・銀座線上野駅より徒歩15分

■観覧料

	一般	大学生	高校生
当日券	1300円	1000円	700円
前売券	1100円	800円	500円
団体券	1000円	700円	400円

- * 中学生以下は無料
- * 団体料金は20名以上に適用されます(団体観覧者20名につき1名の引率者は無料)
- * 障害手帖をお持ちの方(介護者1名も含む)は無料

- 主催 東京藝術大学、朝日新聞社
- 後援 ドイツ連邦共和国大使館、東京ドイツ文化センター
- 特別協賛 デプファ・バンク・ピーエルシー(デプファ銀行)
- 協賛 野崎印刷紙業株式会社
- 協力 ヤマトロジスティクス株式会社、日本航空
- 助成 国際交流基金
- 企画協力 エルンスト・バルラハ・ハウス、エルンスト・バルラハ財団
- 問合せ ハローダイヤル 03-5777-8600
- 出品点数 彫刻57点、素描76点、版画36点、他関係資料 計約180点

- 巡回会場 平成18年2月21日(火)～4月2日(日) 京都国立近代美術館
6月3日(土)～7月17日(月・祝) 山梨県立美術館

◆本展に関するお問い合わせ

- 朝日新聞社事業本部文化事業部 河合哲夫 (kawai-t1@asahi.com)
- 日永勝裕 (hinaga-k@asahi.com)

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
Tel 03-5540-7450 / Fax 03-3546-1894

- 【同時開催】芸大コレクション展「大正・昭和前期の美術」
会期：平成18年4月12日(水)～5月28日(日)
エルンスト・バルラハ展をご覧のお客様は上記展覧会を無料でご覧いただけます。

展覧会概要

エルンスト・バルラハ(1870~1938)は20世紀において最も注目される彫刻家・版画家・劇作家の一人です。その作風は重厚かつ素朴で、心に沁みる深い観照性を特徴とします。困難に耐える人々の気持ちを宗教的感情にまで高め、根源的な魂の表現を探究した作品は、観る者の感性に直に訴えずにはいません。力強い心情表出と逞しい造形表現は、ドイツ表現主義の特徴とされ、ドイツにおける近代芸術の優れた遺産となっています。

木彫の他、ブロンズや陶土などの素材を用い、作風としては伝統からの離反を指向したとも言われますが「深い宗教的敬虔さ」「地域との強い結合」などの心情は、中世以来の北方彫刻の伝統を色濃く受け継いでいます。

「貧困」「飢餓」「死」など深刻な主題を扱う一方で、おおらかな明るさやのびのびとした安定感、楽天的な寛容さを忘れていたわけではありません。群像のような彫刻形態には、うねるような造形的力強さが認められます。困難な状況を逞しく生き抜く強い意志と快活さを刻むことで、生きる勇氣と喜びが伝わる作品となっています。

本展は、「日本におけるドイツ年2005/2006」プログラムの一環として、彫刻、素描、版画など約180点でバルラハ芸術の全容をご紹介します。

展示構成

- 第1章 ハンブルクとドレスデンでの修業時代(1888-1896)
- 第2章 パリ滞在時代(1896-1897)
- 第3章 ハンブルク、ベルリン、ヘール時代…ムッツ製陶工房での制作(1898-1904)
およびヘール製陶専門学校での教師時代(1904-1905)
- 第4章 ロシア旅行(1906)とベルリンでの芸術家としての初成功(1907-1908)
- 第5章 フィレンツェでの修業時代(1909)
- 第6章 ギュストロー時代(1910-1938)…第一次世界大戦中・戦後(1914-1926)
- 第7章 偉大なる制作の時代(1927-1932)
そしてナチス時代における芸術家バルラハの存在(1933-1938)

バルラハは医師の息子として、ドイツに生まれました。ハンブルク工芸学校、ドレスデン美術学校、パリのアカデミー・ジュリアンで陶芸や彫刻などを学びました。陶芸学校の教師を経て、ロシアに旅し、自らの風土と大地とともに懸命に生きる農民たちの姿に深い感銘を受け、それを機に独自の作風を展開します。

5年間のベルリン滞在后、1910年にドイツ北部のギュストローに移住し、彫刻制作の傍ら、数多くの木版画やリトグラフ、さらには劇作を含む文学作品を発表します。1927年以降は、多くの公共記念碑や教会堂聖像を制作しました。

また、ハンブルク美術工芸博物館長のユストゥス・ブリンクマンや陶芸家のリヒャルト・ムッツとの出会いなどにより、バルラハは生涯を通し日本を含む東洋の文化に強い関心と憧れを示しており、少なからぬ影響を受けています。

しかし、1933年以降、バルラハはナチス政府により個人主義的な非協力者とのレッテルを張られ、作品は、1937年の悪名高い「退廃芸術展」に展示され、多くが撤去ないし廃棄される憂き目にあいました。政府による執拗な弾圧の中、バルラハは不遇のうちに北の港町ロストックでこの世を去りました。

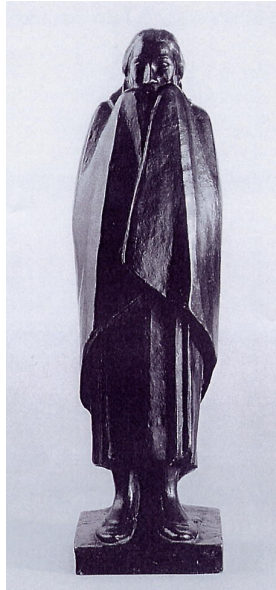


エルンスト・バルラハ

～主な出品予定作品から～



読書する修道院生徒（木彫）



凍える少女



雑誌「ユージェント」(表紙)



歌う男（ブロンズ）



復讐者（ブロンズ）



最初の日(『神の彷徨』連作より第1葉) (版画)



休息するゲーテ（陶器）